



武江年表

甚
初七号

三



リ 5
112
3



門
卷
3

X

武江年表卷之三

延宝元年癸巳

九月廿一日改元

身請弘福寺宗創

宗山後年
禮師あり

聖年子^五中^中法堂造營成○淺草^三直

菅老始○九月十七日後友九代親系率 七十才

○十月廿二日連舟師里村玄祥率○十一月廿念金地院五山十刹法

山慈福^子令^一あふ○十一月廿坊上^大澤成

谷師常味
七世清の云

○十一月廿日斤桐石丹彦率

六十九号宗園石丹彦率乃之祖
あふ宗院之林彦不詳

○幼二弟芝居少^大名^額推^立を^上中^中續^担を^具行^以

元祖照十世
十世あり

初孫^長を^奉り
始^て荒^りと^あり

同 二年 甲寅

武江年表卷之三

二月濱草大田古十五重再建○二月廿六日夜假吉文計の黒雲
来りありあり概引空巾掃を海に流す也

○八月為久保八幡之内時の鐘其切也一引若松殿古事つと持と
候了○了前傍於白金瑞雲寺小經堂を建荒典生一萬餘石
を収む○玉く流あり○松尾忠茂も今年葬祭して凡羅坊

深川本宿を結ひて経久芭蕉一掃を裁 世人芭蕉
居といふ

○十月七日狩野探幽法印卒 七十二才三田大寺より小墓碑あり
所をの内建並一雨之といふ

○同廿四日之五等海堂卒 名正之能出あり
第自持院小葬

○二月六日古等より信卒 ○二月廿六日合於新堀船入あり

○二月十四日古等より雪卒 六十四才之五等と号
葬るよりあり

○九月本撰町山村長古妻共居して始て男我續ねを興行せ
以地の名歌傳聞譽る我といひ梅の小舟遊妓の始小血縁二年未其宝町夜の湯
高の由小舟遊妓といひを傳ふ也一所系居る妻村山又在る未終りてを雲のちふ小舟
男女交りてる系居るを傳ふけりといひ

同日年 丙辰

七月廿五日風雨宮東洪あり○九月候焼海築地中宝中を美勳を
能興行 一本小春
とあり 八の月交る雨降 ○八月十七日儒送神あり之行系降

柙谷小卒 名正之能出あり
豊泰を海に流す ○九月廿二日夜子刻塔とす又宝中火
災本寺安之の所焼火盛あり一人身を焼く一畑中入見像を
持て居る福久生を看るもの或は信と一或は信と一不見古矣

あり又た足跡あり欠損して灰燼の中を尋て拾ひ獲りてを

接てりしのかく

以上津土産小篇のうを畧す

○十一月七日暮六時時吉原江戸町二丁目より火火して為水風烈しく一廓焼亡此火廓廊焼かて本所中の火火して焼る

以時社女十二人焼死以年段の娘始て焼る
二宮家の福を以飯宅少く高貴す

○十二月廿六日江戸火災あり

和洋合運あり
未詳

延宝八年 丁巳 十二月室

己月八日中谷池のまへ横田七郎右衛門のあき事を受ひ以て難司言鬼子母神を祈りし其男木村作左衛門小畑町三又川舟にて今日鬼子母神像を感得以て後七郎右衛門の妻男子を以て翌年此像を本所本佛より安んずる○七月中旬より江戸中町へ踊りしはり災難を以て以て(清制林あり

此案の一本小延宝己の年のせ踊りもかり老お踊るよりなり

○八月六日大風雨本境町甚きを以て之を潮上る

○江戸省板抄 七卷

○本朝改元考二冊刊行 密加為編

同六年 戊午

河原上人奥澤村澤真寺九品佛冥喜 ○東海道釋法鏡五冊梓行

他者 ○平舞妓芝居元江代目市村竹之丞伎藝の巻云々

末詳 貌も災難ありしう加ありて無常を悟り菩提の門に入り今年

廿五日法後を勘定富清を以て為行法作とあり想云を以て

以て舞納の目別藝して舞臺より道を脊おひ法を以て

ある後子年所五ツ目自性流を再興し常行念佛を修む世下

作の奥寺といふ 享保三年
子歳せり ○十月六日猪熊右衛門時行卒

○同月八日古筆二代り榮率 七十三

同七年 己未

夏大為大川筋（注）に生弁あり

○十一月二日浪人平井権八田川に於て刑せしむ（注）
浪人の初め西原を以て
はしりて一舟乗妓
の程なる情状院の長き船を以て廻りて死し一舟は
あふありと云ふ傍に其あふの人も一舟はよりある

○十二月十二日連舟所里村昌通率 六十五才

延宝八年 庚申 八月全

正月八日波木春翔率

北黄坊持次と号し大河の案をあつめて海賊を信し
しるふあり若中御持より小石川柳町祥雲と云ふ率あり

○二月十日初五率時今に率時今に近園夜の如し ○京岡情事
并海考江戸多本
國令より要し

○二月十日初五率時今に率時今に近園夜の如し ○京岡情事
西本頼より今年四
北より築地より
て二月本を建てるあり一舟或は小舟元より本を建てるは唐定後築地より川りて
南向小舟を建てるより一實文三年の江戸名所記より元より八月時始て建てるあり
岡より今に波木坂町を花町と唱ふるあり若中御持より小石川柳町祥雲と云ふ率あり
あり一舟は船の花を高い一舟多しあり一舟西より一舟一舟とあり

○二月初日編布あり其のごとく ○五月林喜森春務率 六十五才

○六月廿九日能人松江惟舟率 七十四才 各守教
俗稱大石守教 ○八月廿八日芝如來寺

五智如來の大佛入仏法あり 再建
あり ○八月廿六日大風為深川本所

原町靈巖寺被焼海八丁塔海上瀆り上て舟を損し人溺るあり

橋損し住持止る谷中法慈寺本堂被焼折きて半傾く 舟が船が再建
のあつて船く

東海屋船折し浩波ありきて民家を觸るあり

○十一月晦日酉の刻より坤の方へ度サ二尺餘長共る船より入り

白く守ありし根の星を長空星とて十二月に至りて見せ

○技藝拾葉集法 三十三卷

此年間記事

永代傳八幡宮の江戸を離れて多摩河の案も稀あり一舟は
のころにありし多摩河二二町のうち酒肆茶亭を造りて服女を

今の町 **二本橋** 比呂進分 **荒元** 井田の **新小田原町** 三河町の **らんあく町** 井田

新町之 **らんきの河原** 一ッ橋より **おせ橋** 今のまご **戸越橋** 嵐丁の八丁橋 **養** 瀬今孫五橋

丁の角 **二所橋** 今云々三橋之天和元年の **久右衛門町** 向折系兼今の其 **法善寺** 上殿はあ

清の橋 **志々つ丁の跡** 日西つあふ **東殿山入** はたふ身天祥里門たふ池ふ

社あり **橋** くく記せり **今の新田後橋町** 令澤町を二田ふ加州彦法

ゆきすき町 後東四本 **郎あり** まご二丁は比呂進今の湯橋後町の西ふあり一ッ橋は比呂進地と後まご二丁は

今の新田引る初後橋中一丸の奉は引まごを海正親が中き親親あり

一ッ橋まご町をありて令辰町といふ和親度 **今の新田橋を役橋とあるは**

車あり一西田ありとつるあるべし **今の新田東の西橋田對馬**

後正橋郎あり **支園橋** 今の新田同朋町後新地の西極本海とあり

新古柙橋 まご二丁の西橋とあり

法船 本新古船 **新橋** 東のくく橋 **今の新橋**

船を画り 考 **回向院** 山門あり **吉原** ふけんん町あり

とあり屋橋の跡 **八丁橋** 今の新田引る武原屋敷のまご **本** 今の新田

小橋町 江戸町志水町あり上町 **お登殿橋** 今の法城 **白金**

瑞雪 今の新田蓮葉の形 **あり** **赤坂** 水川社根津権現社とある

あり **吉井町** 先徳寺 **赤坂** 水川社根津権現社とある

同地 あり **吉田町** 色田圃あり **龜戸** 天満宮向残産之 **深川**

跡 あり **丁** あり **新橋** あり **丁** あり **新橋** あり

島 あり **新橋** あり **永代** あり **八橋** あり **海** あり

又 あり **橋** あり **入** あり **橋** あり **永代** あり **橋** あり

又 あり **橋** あり **入** あり **橋** あり **永代** あり **橋** あり

天和元年 辛酉 九月廿五日改元

二月宮田寺復興寺宗判

上野八幡別為復興寺住持法下
亮與宗基 五月院家と成る

○浅草川廣ぐる ○法皇飢饉 ○山王神田の紅毛船隔年ふり

是迄のあまれ
年毎小やあり ○日蓮上人に百年忌 法花宗十
院法舎 ○十一月廿八日九山本妙

とりの火事ゆつた焼亡 ○十一月廿八日川田り度より火入して田舎
赤坂麻布三田芝生町小町 ○今年より國橋に掛替あり矢の
倉南殿より奉納一ツ目の橋渡へ渡る飯橋を没く今より元安
と以て十一年の復興元福九年より今より西へ経営あり

同二年 壬戌

二月六日市谷小あり一樓本山天龍寺敷火子遊遊年日首

後さる ○二月廿八日俳人菊山宗周江戸を率 七十八才

○三月俳人名田本塚年 未將の男あり ○四月琉球人來聘 正徳久積子

○四月十七日明の朱舜之先生約込年 年八
十二 常而久茲那瑞竜守

并葬以 ○四月廿九日將時雪終年 は十才
探出女

○七月瑞澤本下順庵 はあさる
信稱 年三九

○七月二日大雷に干降雨墮 ○同二日落合泰雲より雲山白霧及泰

禪師寂以 ○七月法藏人海瑞瑞語の於天下一の号を信 よめ

○同月屋形船の寸法法定あり ○八月朝鮮人來聘 正徳尹趾寛副使季
茂綱浪年一於其後

奉抄を
流版と ○九月安宅丸舟船を解ひしるを あつ

○九月より瑞澤於東飯山内小地をのり ぐりやう 学寮を建す あつ 忠中

清より瑞澤を移し かうまやう 燈堂を建す ○青山権左衛門長孫守小古洞

佛所跡地像を安置 あつ 以 あつ 昔本村の月小あり一七六坂

城下に移さるる落城の後江戸持来り今村桑の八丁堀の屋

敷ありしを寺僧住心和尚小納へて今年九月送る所とて

○十月晦日戸田茂晴の男孫右衛門率に墓所淺草金谷より在

り追悼の舟の初る所也のせり ○十二月廿八日東下刻納込大因寺の火

事江戸下管池のとも筋遠山門神田の意日本橋まで淺草法務

同法門の哈町辺矢の内倉を圍焼焼落本所深川小あり取片

のく焼火也 此火は小遇て法室を焚く所の或は焼死怪人小敷一々天井の裏に

人ぬくを捨不悲泣のさぬを哀憫して字寮のり箱物に年々焼く

西を一書籍の科一三二百支の版を全具人小施せりこの版はのり付丁初字の市店土屋

小火入て今年末並ける内亦の古籍一万に及ぶ巻成焼とありしより深川の芭蕉

庵を焼くすこまれば箱も潮小ひびく 此火の後本所士民の心を拂せしむ

元の田圃と漲る ○湯島小町屋を燃せしれ様了場とす

天和三年 癸亥 五月至

正月元日大馬波あり ○正月車長持を捕せしる 火災の所及地の妨とある也あり

○二月六日市谷が火 ○二月十六日平込が火

○浅若小路実蔭公市下向 深中橋日影を立ぬふとて

あこりり其の地素の者し種も亦も起さるるをさるる

○本々筋廣小落小漲る ○二月廿九日納込所八百屋久き坊の娘

お七火刑小納せしる 今年十一月のり小を頼末世人の知る所あり十二月の春松竹梅の

二字を去る模範を由し其の深殿小掲るらふ公小ありこの

お七は管井七面之のまうりし子ある由うくたつけしとて之模範ハ納込所深中蔵意の祖傳也

ありを世奇雑技の事再逢する所なり外は深中蔵意の祖傳也

うけしるを靈筈山法華宗家より之額八百屋娘お七の母也之定室也

○夏江戸大旱久 ○六月六日冬夏平内率 雲一素居士との小管井のり

墓あり再底沈小ま山を掃くといふ ○雲光院本誓と法保と子勸と等とを奉

人の起すて法勇の人ありとあり 雲光院本誓と法保と子勸と等とを奉

の災後本神田の辺より深川へ移るる哈町の如小ありし於所と納込

うりる ○十二月五日江戸焼 合屋小舟 方南未洋 ○りり作 ちくさい 母友徳元 飛或鳥丸

光廣の由徳と云い保志と妻の
以の編之を今年正行せり中
○紫の一奉写本成 戸田茂膳作

御年問紀事

安宅丸の御船を解せしれ一時由志河原ありし由船を被
大船を並せし一川の東岸の地へ移させし

○大船形船を修しし東屋丸 廣原橋 舟田市丸 舟田一 徳一丸 彦直丸 彦直丸 彦直丸

山市丸 日本橋の船之屋 彦直丸 彦直丸 彦直丸 分て大船ありし船橋船の名は紫の一奉江戸

ゆり拾遺集ありあり 事跡合考云天和の以山田江市市といふの徳人の合船を修り 奪ひ丸或人をも叙しけりうりる町りこ木隠を夜八川原并 繫する船形船を修しし一丸彦直丸ありありのとて大船形一奉 町を隠を止めし町りこ元船中彦直ありしとて彦直を修ししとて

○狭谷源見十五里遠流は後十八年を遷て室中舟を修しし

○千川上水舟ありしは安宅天和の以ありし板橋の舟の方修しし ゆりま

のこる舟の池の方より舟は後彦直の柁系船より修しし一あり
流を千川上ありしは彦直七年より止ありし又同一舟彦直の内後彦
川の舟流を業平橋船より引し又彦直中舟修ししを白堀上あり
といふ是も彦直中修しし舟上ありの川船今も業平橋の舟の舟
の橋際より葛原船世継村の方へ通りて小川へ流あり是別と白
堀上ありの船あり 川と事跡 合考小舟
○舟田水屋町の地へ作舟船皆川町へ對あり彦直ありありし
天和中彦直船ありし舟田へ引けり舟田町ありあり水屋町と云對あり
彦直松平中彦直彦直ありありし後彦直の以町ありあり皆川
町といふ松平町代地の舟も元福以来ありし彦直松平彦直彦直
舟ありありありし ○土の以土佐節海より流あり

○天和申儀者も経路へ商人の行状を入る一而より失火にて焼亡以後再興あり一と云

○紫の一丁より日本橋一丁目迄彫り腰刀統町との中紀ハ助助と云

と云まりける池のまこのねん安美深奉不了場の首領深甚の陳二友唐路版田町の志重なる温純云とあり此時代のま有り也

へ一○此以を中り一頃比丘尼の内村田めつと町ありと有り此

玄お娘おま川長傳といふ名より中あり一とそ志おま川羽二

宝永の以まてあり一強持といひ一も土奴ありあり

○此時代山雲山と書り一本村氏といふ雲山ハ肥後中津藩の長子一

のま元あり其後隠元師の忠記猶之者山と方介の友と一これと云の事ハ不同

とあり或とき猶之曰いり不と書ても草力種神雲山と云えんいり中といふ不

○池乃端錦袋園行勸学院の了翁坊の羽衣の産あり初ハ私事不取一

貞享元年甲子 二月廿一日改元

正月晦日彼忘令此定 ○元三大師七百卒忌

○知良院を湯島へ移しぬ 湯島の林田のまふあり

○弘法大師八百五十年忌 ○二月廿日古寺二代り社奉 四十六

○東後寺七仏薬師十谷より麻布 其寺を移す へ移す

○九月廿二日官医忌本寺去琳奉 麻布祥雲寺に葬す ○九月大風家屋を吹

倒す ○十二月團圓忌作保井尊哲天久蔵小正 此寺を移す 改唐の

るをとり貞享唐七卷貞享 ○甲子江戸鑑刊行 松令家板式鑑板行の始といふ

○東寺改唐頒行 但宣唐唐を改めし事あり

貞享二年乙巳

二月廿二日流星東南より西北へ流し先般百里を照り暫く

明々空に響あり雷の如し ○其二田魚屋親吉因長 後井より三

三田の山嶽を又もきりてせし ○五月梓四子福昌寺を東所如来冥塔 このとき

の儀あり ○日暮里院傍に神社造営 ○六月濱第寺智楽院別当

を正教寺と改め山階兼常と改め ○九月廿日将時水真安行年

七十 ○十一月靈山寺再檀林と改め 此所廣事あり之縁之年小本ありといふ

○同三年 丙寅 二月寅

正月一日古寺に世り周年 ○閏三月利根川為を武彦と

なるを中絶と定めひ葛飾郡二ヶ島小島と改め 此寺移り東海川本西の地ハ葛飾郡葛飾町中ヶ島にあり

○二月腹忌令改 元禄三年八月南進加又同三年九月進加

○九月品川河原殿改 ○九月小石川白山権現寺礼始

○九月大石寺移組と号し 此寺の移り

罪科小知せ 此寺組と改めを請ふ言と安永

同四年 丁卯

二月十八日より清系寺親世音寫帳○同寺二五門外令願親世音寫至像建立願より親世音寫破林より像建立

○江戸惣麻子七冊棒打 他者坂田氏

○七月廿二日より廿六日と奉前より於て室はち支効進徳具行

○女岡川家國彙板江戸時代の風俗 ○三田実相より貞女塚念文云云縁及

心伝女貞享に奉丁卯十二月十二日とあり是處は東漢町小住の住居を奉り娘よりと云ふ事にて父母小住あり後三編

ある村田倭右衛門といふ者小塚一と貞操あり貞幸小一といふくまふりうらふ父母再婚の事と近より頻るまひひたうふ食を減一日とてとて自腹を病小冊一夫の命を助けて治る所 惣麻子七冊の棒打はもとの後まても松の標のまへにせし一 凡相惣麻子といふその貞操云々不ふあり 之田井実相寺ニテ寺ありとまへ春町御懸山実相寺あり

此年間記事

貞享元禄の頃より江谷村を去り武士を養ひ追くふりたり

○貞享中流あり六々橋流るまより掛る事ありといりり哉

考志科不中古田中丘隅宿禰のむありといへ船後一ふせし

いひて 岡中云仲古田の二大橋といふ事ふは六々の橋をいひて

○駒込光源より大観音造立江戸の町人九座を寄つて造立江戸林田の連雀町

町屋を建てて高き不寄附 ○千解通一江戸を始る大門通り江戸を寄つて

といひりの上まふてお味一といひ

○江戸河村随見より新堀を丁目へ移る 徳町へ入る角より奥蔵島は丁一

川をまてみちのより道元を矢木土をふきを依せ表門より新川へ表門へ渡り所より不寄居宅瓦葺土葺造なり所唐土葺町を瓦葺土葺止ふたりこれと随見より中見計り

○貞享の頃より大森村の辺まで海苔を製し

○この附けの江戸國浅草花川戸を船川戸とあり

○好古日録云 婦女の普く用るかろふ并ハ貞享年かろふ乃河厨子前所かろふ扱
後かろふ亦かろふよりかろふあて工人小形かろふむ後終かろふ亦十数年かろふ亦かろふて宇内并かろふ弘
まりかろふよりかろふとあり

元禄元年 戊辰 九月晦日改元

美基本所かろふの地かろふ元かろふの如かろふきかろふ亦かろふ加かろふ友かろふ町かろふ屋かろふをかろふうかろふとかろふまかろふ好かろふ志かろふ昌かろふのかろふ地かろふ感かろふ
以かろふ附かろふよりかろふ幸かろふのかろふ西かろふ陽かろふよりかろふてかろふ幸かろふ産かろふをかろふ幸かろふ而かろふとかろふ爲かろふる
とかろふ其かろふ板かろふのかろふ木かろふ小かろふ載かろふるかろふ六かろふ福かろふ吉かろふ川かろふ成かろふのかろふおかろふとかろふりかろふ葉かろふり

○九月神田明神系かろふ神かろふ葉かろふ練かろふおかろふ始かろふりかろふ 河城内かろふ入かろふる

○十月二日儒作かろふ西かろふ山かろふ健かろふ甫かろふ卒かろふ 名收善板本 養玉院小葬

○十月十八日連舟かろふ里かろふ村かろふ昌かろふ程かろふ卒かろふ ○十一月神田橋かろふ河かろふ門かろふ亦かろふ知かろふ良かろふ院かろふ
をかろふ移かろふすかろふとかろふ河かろふ新かろふ形かろふ所かろふとかろふなりかろふ乙亥年かろふよりかろふ改かろふてかろふ筑かろふ波かろふ山かろふ後かろふ持かろふ院かろふ元かろふ福かろふ
寺かろふとかろふ号かろふしかろふ は信濃守より移り筑波山後持院の同八年 匠家未刻一材袋傍掘不令せし

同二年 己巳 正月望

正月十二日儒作かろふ今かろふ井かろふ弘かろふ政かろふ卒かろふ 号魯政卒に 存板ち小葬に

○正月十六日かろふ日かろふ老かろふ人かろふ星かろふ現かろふ以かろふ 老人星の現るの瑞あり活年 福喜とさるの甲ありと

○五月十六日雨かろふ天かろふ三かろふ三かろふ間かろふ堂かろふをかろふ修かろふ葺かろふ家かろふのかろふ后かろふ福かろふ井かろふ淡かろふ右かろふ馬かろふ又かろふ員かろふ五かろふ
千かろふ二百かろふ石かろふをかろふ封かろふてかろふ江戸かろふのかろふ天かろふ下かろふとかろふ改かろふす

○十月かろふ婚かろふ姻かろふのかろふ時かろふのかろふあかろふひかろふせかろふ河かろふ新かろふ形かろふ練かろふあり

○十月廿五日夜かろふ異かろふ星かろふ彗かろふのかろふ方かろふ小かろふありかろふ ○十二月かろふ水かろふ村かろふ季かろふ吟かろふ翁かろふ英かろふ男かろふ
湖かろふ本かろふとかろふ 呂かろふ本かろふ舟かろふ学かろふ方かろふのかろふ始かろふありかろふ 同七年かろふ法かろふ中かろふ小かろふ叙かろふとかろふて

○江戸かろふ圖かろふ鑑かろふ總かろふ目かろふ板かろふ行かろふ 画工石川胤宣後之 編寫一枚幸一冊 ○再かろふ訂かろふ江戸かろふ熱かろふ麻かろふ子かろふ板かろふ七かろふ冊かろふ 和月巻 正角編

同三年 庚午

二月かろふ虎かろふ山かろふ門かろふ亦かろふ左かろふ馬かろふ町かろふよりかろふ汐かろふ留かろふまでかろふ大かろふ工かろふ町かろふよりかろふ元かろふ材かろふ本かろふ町かろふまでかろふ

廣瀨とある長崎町の廣瀨を察 長崎町の海廣小橋の南那須町 鉄炮

海濱地海を小座宅を建 火災の時のため

○四月十五日西恩池を宿屋小空無上人が日念佛念海教を信

群集一十念を父の書の名号をとり事平殿

○五月廿日威徳寺 今天 丈六佛建立致之末詳

○十月清子と別高修法院と談 ○松山集文集 百廿巻

○十二月十七日金胎工横谷宗与終 ○東海道之間珍景梓以

○十二月廿二日昌平坂大聖殿上棟 是まで其の屋戸あり今年この西へり

妻を乃下機 菱川所宣 此の寺の故を 昌平坂と改む

元禄二年 辛未 八月

正月陽島丹大聖殿清浄清浄 上建よりうらまは地は其の林原の坊あり

此をを改むと七十二聖兵史儀の後八画工持神洞雲を画く二月小市遷あり
○十一月祝賀あり寺の時所は時重の地度かり一々今の西代地を改むて種 二月より
おし橋を 古名 一橋 昌平橋と改む

頌大成殿新落

芝山

登、昌平坂我、士山東斯度斯經始、倏忽成廟宮、楹、
依、勝地、莊觀、聳、清穹、畫棟、麗、輪、真、麟、薨、真、玲、瓊、四、配、玉、床、
下、雍、容、珠、箔、中、三、才、抵、太、極、六、經、定、折、衷、禮、樂、字、雅、飾、文、
教、克、磨、礪、山、知、仁、有、梁、川、盼、道、罔、窮、時、否、欲、浮、海、栖、歸、
魯、門、豐、祀、誠、如、在、吉、蠲、捧、芳、樽、神、明、永、隆、監、國、祚、齊、乾、坤、
春、入、舞、雩、節、化、雨、澤、黎、元、

○四月麻疹流行 ○同九月俳人一押打不卜率 か西法思 寺子舞

○同十日俳人福田急急云率 六十五 ○四月碑文谷法花寺谷中威徳寺

布谷自院法花寺想田派をわくくめ天台宗とわくく七月日蓮宗

迂化 列長法鏡法院羅尼多く上本を
こまを世に慈徳奉るとりし

○十二月十二日水府侯儒臣平野雪葉率 ひらのせらふん
公中義家公も小築を
碑く六年山紀少子有

元禄十年 丁丑 二月 壬

五元集拾遺 大小の吟

大 二 庭を 四六 志らく 八九 なく 十一 衆 十二 師を の 志ふ 角

○正月十五日北村湖事率 ちのこ 辛未

五元集 湖事をいふみ

庭くよむ 鏡冊もあり 角

○正月法然上人圓光大作の法号せめふ ○飛石村より洞鏡を湯せめふ

○下谷五條天神今の所不建 昔の上破小を此處火災存瀬川時春の事
故物不建ありと云り今年移されも瀬川

○酒運上法定 ○五月八日より新大橋不於て 湯せめふ
湯せめふ

勅進御具行あり 宝徳を
助を勅む ○六月御奉令通用始ふ

○同月唐同屋十一人不足る ○七月より後必する親老事護持院

大日蓮法蓮立 ○九月飛戸天満玄祐子の法式白川吉田小使は

右宰府の例不准を乞は有 ちやくきよ 勅許を要す

○十月十七日大坂上の町より火災最人等小日向牛込田安庄つ代及町
まて焼之は

同十一年 戊寅

正月十三日西人桃園柳栄率 名守光号幽香赤
池上平門ちふ事

○二月川村随員 ちのこ 百部 ちのこ 禱禱をぬたる天和二年 新梅子あり
皇甲子年あり

○大坂川より普信を命せし是切誠江戸小堀りて奉古事と改め

安治川も此時成より○五月小石川濟殿法造造營

○六月九日医師板垣字煥率廣業合勢七○七月備作園井惣菴名義号と東皇

○七月廿二日新堀白令濟殿まで堀あらし

○八月朔日永代橋今日より修理成り

○八月東叡山根中文殊橋二五門并山王社濟達立今の西へ

廿八日仲堂入佛あり九月三日信長五日より商人多指を回さるる江戸のそご

町屋をひらた廣小橋とせしむるもこの時あり平水町八軒町立新町車坂町

のち茶小柳町里門町未元掃せしむ新田と西の堀へ代地をあらし

南郭文集 東叡山瑠璃殿

一旦經營結構新 入門何處避紅塵 玉樓金殿高多少

不庇貧民七尺身

○九月六日段橋殿の勅額刻記あり以勅額六持段院基時書みひし所如後

量りて三重の柱を竹本を以て造り柱石は石槨板を打自然を以て文字を施し

減る能くとのひしを法書し

○同日己刻より橋南瀧町より火出南風烈しく大名不活通町筋

神田下谷と野法本坊濟系山谷千段掃部宿九三世三乃半燒

河内八尋の道幅十五尋と成り○二時新神社坂本あり

山中事記本坊濟系同系町へ移る○十二月十日本石町式目同より

火出本坊靈巖港八丁堀狭炮所個を山まで燒る日本橋燒成り

人多く死す○十二月画工より賀瀬湖瀧せしむ

○十二月廿二日備作本町明店率

元禄十二年 己卯 九月

西國横山町續矢の法務を去年災後今年二月西門跡より東に法務を移し、一より法務を西に、由り京保の始に法務を西に

一不本橋を造りし事

此の法務の跡に町を廣く造りあり大々の法務町と成り云々

此の法務の跡に町を廣く造りあり大々の法務町と成り云々
此の法務の跡に町を廣く造りあり大々の法務町と成り云々
此の法務の跡に町を廣く造りあり大々の法務町と成り云々
此の法務の跡に町を廣く造りあり大々の法務町と成り云々
此の法務の跡に町を廣く造りあり大々の法務町と成り云々
此の法務の跡に町を廣く造りあり大々の法務町と成り云々
此の法務の跡に町を廣く造りあり大々の法務町と成り云々
此の法務の跡に町を廣く造りあり大々の法務町と成り云々
此の法務の跡に町を廣く造りあり大々の法務町と成り云々
此の法務の跡に町を廣く造りあり大々の法務町と成り云々

○二月社天和高生実大農も不収蔵 ○二月日日本橋辺より火

筋邊内りまで焼亡 ○二月日日没の小角十年忌法事

○八月十九日大風 ○九月六日川村随員卒

同十三年 庚辰

二月下谷車坂より火淺草辺法務所を焼亡

○復國するに機州法務所を釋迦如来堂

○永代寺築地六万坪成 ○八月十七日より葛西飯塚村父白觀世音

お現より二年二年固めて安住 ○深川佐賀町今川町の辺より

材木原を六万坪の地をめぐりて引移る今の木場あり

○水本辰と扇山村長を交り其居を七変化の形をよむ

同十四年 辛巳

正月元日卯辰刻日蝕 ○武記云永代橋の辺より大河内河多敷

正徳ありし今幸正月元日玄冥何の故とも知悉く女の首
級あり人々驚きし小首首ふ人の頭を得る幸武門の祥瑞あり
とて是をまつり聖家地祇亦崇む世人得てらん後小首のり遊女
庵の社ありと云ふしなり今も永代橋の側小小祠あり

○二月十九日古学五代り限率以五十七才 ○二月天波宮八百年

清忌来幸亦因み付毎戸社不於て侍等連御具あり

又元集 正南の白下 松林やあつむる幸の八百 ○二月系真如皇古奉太子江戸あり

宿帳末洋 ○二月十日後時家古良家事あり一日之世人の

知る不ふへ下り賛せば ○二月麻布清殿初てお茶

○二十三間半深川不後建立 元集 新二十二年

○深川清源古祥守宿剗年才天を安と並以 元集 新二十二年

○肌體ふと門て本新法悉く示り非人小庭を建し
○十二月和人参長管川安清香具在後徳の二人く高ひ
清免あり

元禄十五年壬午 八月

二月十一日山谷庵町よりお火青山麻布を世浦品川下り
その時麻布清殿品川清殿妙玉と立守儀二王門焼亡 品川清殿 清再建

○二月十五日日本院の上り傍京杭をさる

○其より葛西坂塚村夕日親世言に戸茶近とより多治章
集する事跡一村長の家より後世の茶とておけ非初あり

とて後人こまを求む 又江戸西くの古院も五七日のちて 正徳せうぶ重地を新む村内のお

○天満宮八百年清忌 西行上人五百年忌宮後法原三百年忌

○二月三日田名稻新靈告板の櫃より靈泉をかり眼疾を癒するの法あり水いありの名い

○六月廿七日湯涌靈雲寺湯涌山澤巖和尚覺彦比丘寂世六十

○國八月廿一日舟人北村正立率栗吟の二男あり舟中

○寺濱村百母僧方東の娘比地比地の叢中より不動尊の像を得

○貞徳翁五十年忌新田貞徳居士誓の中より終らざりて

○十二月十日後村家の義士四十七人奉意をなす寺八口小鈴

元禄十六年 癸未

二月に日後村家に十七士自京來て之を葬す

新井子其悦完終片 冬冬の身ハむらうの山 子系原終小 梅一のむ山を
わさし死あ山 三つともふら南地あり或は秘書其事と記せるのあり月司の書
名の
夏小卷

春滋盛傳 春城紀傳 かふ記 追かふ記 介渡記

郵權大元記 權花集 春穂忠臣記 武家源流記 易水連袂源

義人孫室直 忠士傳記 山科の改書 忠義碑文 忠義傳

楠之端 瑞光院記 義士考 義士傳 義士絶緒

蓮雲記 淺秀記 義士文通 義士傳

春巻春穂四十六士傳 繪本忠臣傳 春穂忠臣傳 重保巳亥

○二月九日儒作松田映翠率 萬合齋雲云小華

○小柄京日慶も再興 ○二月麻布春坂辺焼亡

○二月廿一日石川波中より飯の居梶川ゆまの子孫流十二方あり深川

世に乃重小矢救を射る 善方より翌日午刻と半中起救まふ二五三本世兵一

善方よりぬひくハ又百勝を射る 十一中と射る又小守まてる 亂及ふ一終て後を乃

○五月廿五日久保天徳寺の門におき去歸り妻三人の男ふとせむ

熱助と号三番
雲のころと号

○十一月十日儒所坂井伯元卒 号御軒約迄
竟光寺小堂并

○十一月廿二日雷より電強く夜八時地鳴る事雷の如く大地震
戸隙子うのき家小船の大浪小動く如く地二寸より五寸より
て五六尺程刻は砂をのり上あつひを吹かすもあつた
石垣壁も家屋潰れ瓦落揺あけ死人夥しく泣きけが声樹小
置多ひも又雨く驟ニホる家より失火あり八時迄津浪ありて序総人
る多く死に内川一とひ屋引に夜ありは時より救急地震あり
おひ小田系ありて夥しく死亡者九二子三百人小田系より品川迄
を方み子人房舟十万人江戸二万七千餘人 内廿九日火災の附あま搦あ
死のりのみ七百二十九人あり
あり一昨日の小揺り此時深川世之間を覆る廿二日夜より
あり此方小揺りあり此を後十二月まで震ふる志ありあり

西川神代の志をもりも多うこうね清代のあり中尾通次

○十一月廿九日秋大風幸々追ふより火一々あま焼又小舟より
お火一々山風も隊と神湯の天神聖堂も遠搦向柳系隊草町
南六神田より傳る町小舟町堀田小綱町幸所へ此回向院の辺品川
永代搦まであま搦あの方
まか焼産物も五所焼る是を世に地震火事
といふ○回向院いしん一云觀音像山門にお女画一々あり十一月靈友の
告ありて機上よりあつた廿二日夜地震の附山門也倒るつひて
廿九日の大火小使も焼るなり此時本堂を拵返すつらあり又あり
諸人信心のあまして多前群集せしこと 一云観音と八十一云初聖
てま会釈叶とりのことあり

○は火事小舟人小枝も焼るなり「焼ふりりされも機さうぬうち支考
梅り香やまの一番し焼見舞 牧童

世年同記本

居けるり別荘の客あり一附居るり白むくの候し一揚屋入
一ける客の懸あり一とり是を去れ候し八朔より一殺小白むく
を以て事小あり一は花街大金小りり

ある首の柱女小津清丹後
お津清長門守杯ありしりあり

是等のものつゝ武家の別荘のつゝ
八朔小白き衣裳を以て一とる尚考

○本八町堀三丁目辰紀伴由左方重材木を以て世より 霊巖寺後

を以て居る方重材木を以て世より 此女人元禄中嫁小大分限とあり一

人の子あり花街新劇小遊ひ持くの候きを以て巨万の家を賣

一ける事法人の初所あり一とる賢せ候

○江戸真妙六十帖元禄中の
事とせり 小形人坊と云とる喰町小僧と云今と

揚本町へ引移ると候り○一家兼活小り小武に兼意思と

江戸小形所小山判官を殺し一とる候と云候小妻兼福前の揚

社小小山判官の霊祠あり又嘉永の坂下海井小平の及後若狭
中及後及後境の市小小山判官の塚あり一けり作敷候りて元禄
の頃まであり一とる崩きて今あり候り候と云

○元禄中の豪家井田依久男町小僧と云一尾実在り候と云り

唐仏の釈尊の立像を得て牛清弘福寺に寄付し奉り候と云

友阿りて中宮若菜玉院一安齋以尾実代々の墓の若菜玉院小在

彼支那の像もありと云○元禄中江戸年法小僧切と云

○元禄六年温清軒の江戸繪巻小僧二丁目二丁目の方若菜所
の地地有候町方若菜にヶ所所あり其新橋へ後橋と云り女玉
橋の矢の市流の南と云り一丁目橋の隣一とあり
其橋の吉祥と云あり今分の昌平橋と云は橋とあり

村松町を筋遠山門内

山門の跡より連花
町の四世の側

ありて青店と記せり

村松町八
條の邊なり

高この所
あり 昔の志ある橋と今の如くありし橋とあり志ある橋のたゞ今

のよゝゝ小細町まで丁目のせんの橋を志る記せり今の山下門を介

ひやとあり 月十二年の馬あつた橋とあり
又は山門を昔の旗門と云ふ 上野清丸親善堂の今の橋

山と唱へる所の山あり 大塚渡の山門の跡は田圃あり

○三圍稻荷社内一丈の狹あり畑の邊店に焼くまゝの草子とて焼くとき
略と云ふ狹うとありとあり 子稻荷や狹うひかひ焼く

宝永元年 甲申 二月晦日改元

二月廿七日地震に月まで交々地震

○女玉橋と新大橋のふる小道を付く 去年の大よみふ女玉橋
人多く死する由の事あり

○三月年号改元あり 一祥吟

宝永の給下りりる色糸の糸

冠里云

○五月二日奉国流多海元祖奉国親伝卒

十日向本流
并葬儀

○六月十五日より七月朔日二日江戸を辺大馬大川筋を介大坂八月

二日より山ありおて下総橋より股より押一崩一田畑を家より三平被破

して死七人殺を知りて奉祈河川清浄山管中管辺屋宇をひて

○六月廿二日小堀政実卒 妻政実二男松十五郎の孫なり
書をよめしむる一書六十六

○七月廿五日より九月朔日まで復元を小松子土佐公五太山又殊

善護國帳あり ○八月御入之井を志卒 四十八才二世
の志あり

○九月井田明社清遠三あり

○十一月聖徳宗再建儀廿五日遷座

○今年よみ橋あり清不始て盛世縁の鬼世を
かゝ名ありとあり一書一書清下りり

同二年 乙酉 二月

寶永三年 丙戌

正月二日備前柳井云輔率 名希綱号管海孫小左衛門 鯉河柳田夏子并兼也

○正月十日秋子刻赤田須田町より火入一ヶ筋遠見附土多町

赤井田町へ赤田石町通り小橋町河津町大門町より長谷川町和

泉町河津町辺赤大坂町赤村本町までより火入あり翌十九日

夜別館へ○正月十八日圓向院中於て火入二ヶ筋大火火入死矣

せし紫五十年忌吊法事あり○二月廿日夜亥刻赤井銀座町へ

火入あり赤井町赤井二町海燒亡と

○正月十日梨子の赤井驛率 之田氏名希綱号管海孫小左衛門 兼以輝世 此の村まゝにそゝるはれありて 命のそをま ちよふあり

○正月十七日備前栗山溜率率 名希綱 兼源助 約以輝世と兼

○六月元字令吹替あり是を室字報といふ

○七月より根津権現社為財の巫女所再興十一月燒物以舊地分

り園子坂の新あり○七月廿二日大要救う赤井落る

○八月將狀松林信法園田植の額金五八幡宮へ掲る

○九月十五日亥刻大地震○十一月九日医師藤生方菴率 名希綱 祖殊

の父之田 長松と兼 ○屋敷船百艘不極る 名希綱の戸所子 捨置といひり

○十一月十六日己刻に谷作町より火入に丁半海燒

○同月廿日夜子刻和泉町後より火入大坂町後吉町急方急町堺

町葺屋町火入芝居赤井町長谷川町は急方急方赤幅三町長十

五町計り燒亡

同日 丁亥

正月十日川端地為財天僧正再建ありを稱院と云白倉位有兼

絶然の事あり ○正月十五日申刻溪町新園心町より火事所一の
橋舟才とあり申の川業奉天社の社を元小橋ふり宮子別所

○二月晦日能人榎本氏角卒 四十七才 号宝晋 二夜上河古小井氏

○二月八日大火あり一申正保藤小記り 未詳 ○保康朝能山出處を
流井回向院を定住 ○五月廿二日在敷山勸学院より僧侶寂

○七月二日午谷重福より持持法中寂 在信の目より田来より 甲辰流室字より一人

○八月朔日小石川を焚き橋辺より火幅に町を二年町程焼く

○九月日自熊谷安左衛門卒 儀弟が法より小墓あり牌の右小安相より如月の夜
の園をてつひんを ちくくは世のやの果しや

○九月廿七日信所松浦交翠卒 六十郎才久黙持友立市
日暮王七由京より小善井

○十月十二日能人服部嵐雲卒 九十郎大納言常持より小善井を拜世の白
一葉翁咄ひくちある風の上

○十一月十六日連舟作里村島陸卒 六十九才

○徳国銀札止あり

○十一月廿日より富士山の根より頂をり焼く天晴く雲声地震
野々く雲声白灰降りて雪の如く地を埋むる頻りあり

あり白晝暗夜の如く小流の燈挑灯をとりを廿二日強子より

廿四日より天晴を皎日を深く法人安徳を又廿五日廿六日

再び天曇り砂降り雲声の如き雲声地震あり是より雲声降

廿八日平常の如く此時知味より山を宝永山といふ世人は以て噴

を厚く いふ物煙案小戸をえより竹首富士山焼る例は延暦十九年三月廿四日より
四月十八日と今年のもの焼負規元年五月十日焼くこと云く

○十一月廿八日法人五寧字卒 三田小山
大塚寺善

宝永五年 戊子 正月

正月元日大由 ○正月三日武蔵相模三河をく砂降

○二月地上小白色を生じ ○三月秋元彦彦信忠田彦助といふ人
或及入る那場なむら兼井の田蹟久しく處を去る人のを歎き

之標を並傍小碑を建る ○四月親日兼人山田宗備そごうへん卒 八十九才
名周字

在申頼吉地中長童とす兼井に子 二人有山田久也宗屋そごう少禮字宗俊と云

○五月十文議よりめて通用始る 妻小室永通室妻の婦小形久世用と
あり経一寸二分重一女文字小田宗彦の

巨多之棟梁河の 深川の河門 世に地産ちぢん 正元金洞かねどうの地産を六軒を造る
門人植は河門と云く

と今年より始て江戸と別小安すすむ品川品川と 今年 山谷車録
九月迄

寺 宝永七年 巳谷恭字守 心徳二居 徳川 梁野らやのと云す 心す 心徳四年
八月迄 九月迄 九月迄 深川靈巖寺

夏保二五 同新永代と 享保五子 〇冬より麻疹流行
四月迄 七月迄

○十月廿二日算測の作関新助孝和卒 号自史因流祖也
外史法編と云華

○推子源新本北佛觀世喜實帳

○十一月十五日深川八幡宮由造營遷宮 ○十二月二日将野隨川岩佐
卒 八十七才

○十二月廿二日後後十代藤原重平 八十三才

○十二月谷中威感と 今のの隣とある空と世乃店室小尚齒合あり
天孝

此時後辺幸居百廿七才あり上府あり椅子ふよる妙なる派の

僧二人は兼衣信人素袂徳ありと云ふと云 長生藤原春秋殿下老門内月生
此時と云く座のふ小機あり是上

席の着の古実ありと云ふと云 幸居の幸居必極及は必渡河之天正十年壬午小生るは信の比はさ
の勢切あり仕を拜し後便叙し之唐土小なりと云ふと云 天竺阿羅漢を始と云ふは信の比はさ
九十九才の時後朝一室の八才卒 同小云幸居老人の及小八十八才あり是のせり

と云と云くは信より上府小八十才ありと云ふと云八十の人と云て是ありと云ふ

宝永六年 己丑

正月十文錢通用止 ○去年十月廿二日の後為降し以正月十一日

夜ふと降く為降る 折葉草 ○二月漏夜河運上河免

○四月二日より七月二日まで深川八幡宮実帳

○六月宝字报通用をりまる

○七月より九月まで日向院にて洛東浄苑院迄不初を寢帳

○九月多賀朝湖降々をゆりたる後英一様と号し深川長盛町下町

○十二月廿二日能人小澤得入率本取町坊正なり

○後边事店对话记成杉本義澤編写中

宝永七年 庚寅 八月閏

二月上野清乃稻石社儀草約形を移す

○二月二ツ宝銀法改改之稿大木石植を築せしむ法

札協定○湯ノ久田波守寢刻岡山本食米高上人あり享保三戌六月七日

○其回向院を移免せし作如未寢帳遷化九十

○二月十九日南田川本母を梅の丸七百世二年忌大念佛回向

○二月より五月まで水代を承けたる於て其後

岩城愛服の孫池系於朝々持守かひい發實の親世言又且あま慶の不動言

関帳○二月より五月まで深川山行寺を荒包の阿比海池をり

并海仲公軍陣の事伝ふ事親世言二月月不動言おん能も舟才

天寢帳○二月乾金五二ツ宝銀通用始り即寢刻通用止

○七月十一日深澤寺刻立の松雲禪作寂二十二年

○七月より室八月まで市谷八幡宮境内に於て浄法流法輪を虚

空を寢帳○九月廿一日其口西門法鏡をりめて徳人姓来り

日は若二丁目より三丁目まで其口二丁目二丁目三丁目と改り

○十月十日亥刻池上奉門を焼亡一本五十二日

○十一月琉球人素勝心後安里子武随等心後安里子今年来り

大史ありし中あるせり ○十一月青山梅窓院の齋齋を繕改ん
 とせし時住持法蓮社寺管鏡的上人の愛小於女末り承畜身
 小く佛果を得し一偈て一面の鏡を撰く末より別く八毫を
 加し一鏡を請ふる解脫を以るの因縁ともあるべしと云うと思
 へし爰覺て後例も一面の鏡あり上人奇異の思ひをわすしこの
 鏡不如しを繕改むむしり

○十二月十九日末小別神田小柳町つぎ真田お山中を去り
 お火水為風烈し一々半町石町八丁塔靈巖海多々お長干
 五町幅に尺町より七八町ふお聖日辰別結し

○年中七面板七面大明神勅請菊しりる女はあまの命の後
 爰の昔ありくおある所とを

此年問記事

室永中靈爰ふしりてお初辰の月ふましる像の園廢ま江戸
 金地院境内に移す

○室永中疫病を争りし以約迄の百姓おしりすの妻お末の尻を
 削り約迄屋敷の市不賣らるる末ゆりしりの疫病の患をのこし
 たり後屋敷を争りの方おとまより此時代辺辺の童子染を机を
 消けりとし ○塵垢消不薩摩芋の奉日本ふの室永元申奉ふ
 あり薩摩より種海り末長流多くお種くはゆたり東保
 井奉乙卯小石川書生お裁くをえうふりしり弘まるとし記り
室永中靈爰ふしりて
 考をわすせり ○白鼻紙袋この時世より始る

○室永中武若お落中洞の冥陰に坐る末市十向の時屋敷を
 移す月と花とを知らん人小見せを也屋敷の雲のほり

○寛永元年板遠^{とちのち}近^{ぢゆう}乃^の平^{へい}の江戸島小島^{こじま}を掃^{はら}かすの事ありて
有^ありて其^{その}の南^{みなみ}洲^{しゅう}久^くの内^{うち}務^む跡^{あと}町^{ちやう}と成^なりて其^{その}の南^{みなみ}羽^は田^{でん}亦^{また}作^{つく}
軒^{けん}を並^{なら}べりて飛^と戸^こ新^{あらた}築^{つく}有^ありて天^{あま}満^みを以^もて其^{その}の方^{かた}小^こ阻^{とど}りてあり

武江年表卷之三 畢

